



## 大学受験コンサルティング問題解決型アプローチ

- あなたにも出来るロジック式手法のすすめ -  
大学受験のロジック 松原一樹 著

# strategic consultation

はじめに …………… 3

やる気が続かない 前編 …………… 8

やる気が続かない 後編 …………… 18

英語の成績が一向に上がらない …………… 29

科目が多すぎて手に負えない …………… 39

あとがき 受験の先に …………… 57

【はじめに】

あなたが大学受験に立ち向かう中で解決困難な問題に遭遇するときがあるかもしれません。

本書ではこれまでのコンサルティングを通じて得た最も効果的な問題解決型アプローチをお教えます。

本書はただ単に理論的な考えを列挙するものでもなければ、具体例を散りばめながら説明するスタイルでもありません。

あなたに問題解決型の考え方を体得して欲しいので、一人の高校生 陽一君との対話の中で吸収して欲しいと願っています。

つまり小説のような形式で話は進んでいきます。

楽しみながら、自分に降りかかる諸問題を解決する術を身に付けられることを望んでいます。

株式会社未来研究所 代表取締役社長

松原 一樹

【ソリューションの立案と実行支援のすすめ】

私は大学受験のコンサルティング会社を経営している。今日も迷える一人の高校3年生が訪ねてきた。

彼は、言わずと知れた最高峰 東 大学法学部を目指す高校三年生。名前は田上 陽一。成績は中の下。偏差値は50前後。

彼には悩みがある。

- 1 . やる気が続かない
- 2 . 英語の成績が一向に上がらない
- 3 . 科目が多すぎて手に負えない

特に1 . に悩んでいるみたいだ。

やる気が続かない 前編

松原（以下L）：「やる気が続かないって悩んでいるようだね」

陽一（以下Y）：「はい。そうなんです。ホント嫌になります」

L：「でもどうだろう。私から見れば陽一君は結構やる気がある方だと思うけど。」

Y：「確かに凄くやる気があるときもあります。でも、何ですかね。続かないんですよ。そのやる気が」

L：「そもそもの話して良いかな？陽一君はなぜ東大にいきたいんだっけ？」

Y：「僕は高校入試で失敗したんです。今の高校は不本意ながら通っている感じです。だから、次こそは自分の一番行きたい頂点を目指したいと思っています。そして弁護士という職業に魅力を感じているので法学部にしました。」

L：「なるほど。志は立派です。そういえばうちにも自分から連絡してきたよね？」

Y：「ええ。もう薫にも継る気持ちで申し込みました」

L：「となると、やはり陽一君は非常にやる気があると判断できるね。これまでも自分でいろいろ試してきたんだよね？」

Y：「そうですね。今の偏差値50だって最初のレベルからすれば大前進なんです。さっきも言いましたけど、僕は高校入試で失敗して自暴自棄になった時期がありました。そうすると入学当初は成績上位にいたのに高2の秋には偏差値

40 近辺。実際模試の問題は難しいし、偏差値 40 という数字は実際には先生の”偏差値 29”とそう変わらないと思います（苦笑）」

L：「いやいや私の偏差値 29 には到底・・・(陽一がさえぎる)」

Y：「まあそんな感じの低レベルなので、勉強法の本を読んだり地元で塾に通ったり、当然自分で勉強してどうにかここまで来た感じです。」

L：「すごいと思うよ。自分から目標達成のために情報を追い求め、単に知るだけでなく実行に移している。非常に素晴らしい。」

Y：「確かにそれまで我武者羅にやるというより、より良いやり方は無いか探りながら進めてきました。でも先行きが不安だったんです。本当に自分のやり方で東大にいけるかという不安が消えず・・・」

L：「それでうちに入会したんだね。」

Y：「そうです。先生の本を見つけて。その安心感は今まで感じたことは無かったですよ。だから自分でもスゴイやる気が出て勉強していたんです。」

L：「今は情報が溢れているから情報リテラシーがある人は自分で選択出来るけど、保証は無い。その点、うちはそれも生徒に与えられる最重要な情報のひとつなので、その言葉を聞いて安心しました。でも問題はそこからだよね？」

Y：「そうなんですよ。自分のやるべきことがすべて見えて来て、手ごたえも感じています。わずか 2 ヶ月しか立ってないけど、前より問題の本質が見えるようになったんですよ。」

L：「それで？」

Y:「でも、なんででしょう。本来そう言った手ごたえが感じられたらもっとやる気が出ると思うんですが、やる気がなくなるんです。しかも何もしたくなくなるといふか・・・」

L:「かなり落ち込んでいるようだね。そうだなあ。今からいくつか質問するから、あまり深く考えず答えてくれるかな？」

Y:「よろしくお願いします！」

L:「まずは陽一君のことで。一週間の過ごし方を教えてください」

Y:「月曜から金曜までは夕方 18:00 に学校から帰ってきてすぐご飯を食べ 24:00 までダラダラ勉強しています。土曜日は第一第三土曜日は学校が昼間であるので、帰ってきて 15:00 ぐらいから 23:00 まで勉強して少し早めに寝ます。第二第四土曜日は朝 9:00 から 23:00 まで勉強し、日曜日は 8:00 から 22:00 まで勉強しています。」

L:「なるほど。勉強時間が長いね。ちなみに、たとえば平日の 24 時までの勉強は休憩は取っているかな？」

Y:「いえ、あまり取っていないですね。」

L:「さらに質問。東大だから科目は多いと思うけど、一日に満遍なくやる？それとも曜日によって科目を変える？月曜は数学で火曜は英語みたいな。」

Y:「後者の曜日によって科目を変えています。」

L:「なるほど。例えば陽一君の苦手な英語は何曜日に勉強してますか？」

Y：「月、水、金曜日です。英語はなるべく多く触れるようにしています。」

L：「OK。では例えば月曜日はどんな分野を勉強してますか？英文法や単語、長文読解などで」

Y：「そうですね・・・英文法・英単語中心ですね。英文読解も勉強しているのですが、あくまでメインは基礎知識の補充で感じます。」

L：「基礎的な知識は重要です。英語の建設的なアドバイスは後ほどにして、まずはやる気の問題ですね。じゃあ英文法なら英文法ずっとやり通す勉強をしているんですか？」

Y：「まさしくその通りです。ちなみに月金は英文法、水は英単語です。」

L：「ひとつの原因は分かりました。率直に言うと、陽一君の学習スケジュールが原因です。分かりやすく言うと、毎日拷問のような勉強の仕方をしているために効率が落ち士気が下がっていると言えます。ただこれは原因のひとつであって、まだ他にあるかもしれません。親御さんのことや学校のことで続いて質問しても良いですか？」

Y：「親？親は関係ないですよ。(ややニュアンスが変わる)」

L：「(何か話したくないようだ。もう少し陽一君を理解してから聞くことにして今は突っ込むのを止めよう( 1 )) 分かりました。学校のことは聞いても良いですか？」

Y：「学校のことは何でも聞いてください。」

その後、松原は陽一君に学校のことについて深く質問した。授業や補習授業、

学校の先生との関係、友人との関係でやる気を削ぐ事項は見当たらなかった。

L：「結局、今はもうどのくらい勉強が手につかない状態ですか？」

Y：「もう二週間近く勉強してないです。本当に困ってます。どうにかならないですか？」

L：「最後に質問します。陽一君は確か弟さんいたよね？彼は今高校生かな？」

Y：「そうです。弟は私と違って出来が良くて私の行きたかった高校に通ってます。現在高1で成績も上位らしいです。親はその話ばかり僕にしてくれます。」

L：「今日は少し話し疲れたでしょう？質問するのはこれで止めます。」

Y：「ありがとうございます。言いたいことはすべて聞いてもらった気がします。」

L：「実は気がかりなことがひとつあるんだけど、今話を聞いたうえで解決策をお教えします。」

Y：「はい！」

L：「今から言うことを二週間続けてみてください。コンカレントワーキングとタイムスロットマネージメントです（ 2 ）。」

Y：「それってどうゆうことですか??」

Y：「順番に説明しましょう。まずタイムスロットマネージメントについて。これは簡単に言えば時間をスロットで管理するということかな。」

Y : 「??」

L : 「勉強時間に休憩を定期的に挟むということ。勉強時間90分に対して休憩を15～30分取る。ただこれだけ。」

Y : 「先生の本にも確かそんなことが書いてありましたね。でも僕はその休憩が非常に無駄だと思うんです。90分ごとに30分も休憩取るくらいなら早く終えて寝るほうが良いと思うんですけど。」

L : 「休憩を削れば物理的には時間が増える分、勉強量が増えるように見える。ただこの休憩なしの勉強は士気低下の点で致命的なんだ。」

Y : 「致命的ですか・・・」

L : 「そう、致命的。人間は最大でも90分ぐらいで集中力が切れる。集中力が切れれば効率が下がり予定の勉強量をこなすことが出来なくなる。そうになると士気が下がる遠因になる。時には直接的な原因にもなる」

Y : 「なるほど。僕は毎日予定の量をこなすことが出来なくて、過度な課題を自分に課していると思って減らし始めたんです。でも減らしても減らしても終わることが出来ない。少し前だったらこなせる量がこなせなくなり自己嫌悪に陥りましたね。」

L : 「それは体力の消耗に似ているね。徐々に自分のキャパシティ(限界)が低くなっていく。そしてそれが自信喪失に繋がっていく」

Y : 「じゃあ必ず90分勉強して15分休憩すれば良いんですか？」

L : 「いや、必ず90分勉強しなくちゃいけないということではない。90分以上連続で勉強してはダメだということ。」

Y : 「じゃあ予定で決めた範囲が60分で終わったらそこで休憩して良いんですか？」

L : 「その通り。そして休憩するときは机に寝そべての仮眠がベストだね。擬似的な起床感覚が得られるしね。」

Y : 「机に寝そべる仮眠は苦手なんですよ・・・寝苦しいというか。。」

L : 「そう、まさに寝苦しいというのが1つのポイントで布団の中でフカフカ寝ていたら勉強どころではなくなる。眠りに入りにくい状態で静かに目を瞑り、それこそ音楽を聞きながらでも良いので15～30分休息する。これがポイントだね。おススメは仮眠の前にカフェインの入ったお茶やコーヒーを飲むこと。ちょうど仮眠から起きるぐらいに効き始めるからね。」

Y : 「なるほど。最大90分勉強後に15分の休憩かあ。休憩といっても仮眠を取って、仮眠の前にカフェインを取る・・・かなりテクニク的な要素が強いですね。」

L : 「陽一君は大学に行きたい気持ちも強いし、勉強できていない自分に対する自己嫌悪がある。つまり潜在的にやる気があるからこそ、そのやる気を上手く持続させるにはこういった技術を取り入れることがKFSなんだ。」

Y : 「もう1つありましたよね？コンカレントワーキングでしたっけ？同時作業??」

L : 「その話の前にタイムスロットマネジメントでもう1つだけ話を聞いて欲

しい。今話した90分：30分の法則は、あくまで短期的なものだね。1日という短い時間の中での話し。陽一君は一週間の中で休みがなかったよね？」

Y：「そうですね。」

L：「それもやる気を削ぐ原因なんだ。一週間という時間の区切りは人間の本質を表しているんだ。つまり、キチンと一週間単位で休みの日を取る必要がある。」

Y：「効率上ですか？」

L：「実際試してもらおうと分かると思うよ。まゝそれは今私が言うことでもないから陽一君が実際にタイムスロットマネージメントを取り入れた後に感想を聞かしてくれ。」

Y：「でも1日休むのは気が重いなあ」

L：「その週の勉強量を決めておくんだ。そしてそれが達成できたら自分にご褒美をあげる。」

Y：「なるほど。なんかゲームみたいですね。」

L：「人間の思考回路は無駄な労力を極力使わないでいいように思考を単純化するんだ。具体的に言うと”勉強をこなす ご褒美で休める 楽しい休日”という思考回路が単純化されて”勉強をこなす 楽しい休日”に短縮され、まるで勉強が楽しいものであるかのように錯覚してしまう。まゝこの思考の単純化が弊害をもたらすこともあるけど、とりあえずやる気向上には利用するのが良いよ。」

Y：「少し確認しても良いですか？」

L : 「良いよ。」

Y : 「単純に言えばタイムスロットは1日の中だけでなく一週間という長いスパンでも取り入れていくべきということですよ？」

L : 「その通り。」

Y : 「これなら早速試せますね。」

L : 「続いてもう1つのコンカレントワーキングはもっと簡単なので聞いて欲しい。さっき陽一君も言っていたようにこれは同時作業のことなんだ。しかもこれは一日の中のタイムスロットマネジメントと組み合わせると効果が大きいよ」

Y : 「具体的にはどうゆうことですか？」

L : 「英語を勉強する日があるよね。そのとき最初の90分で長文をやったなら、休憩後の次の90分はそれ以外の分野、例えば英文法や単語をやった方が良い。」

Y : 「それって例えば、最初は数学をやって次に英語をやるとかでも良いんですか？」

L : 「そうだね。このコンカレントワーキングの目的は作業を同時に進めていくことで効率を上げることなんだ。作業を変えると新鮮さがあるので気分転換になる。」

Y : 「これも早速実践してみます！」

L:「これから二週間、ちょっと頑張ってみて。そして報告をください。あと休む日はずっと変えないで決めていた方が良いでしょう。毎週日曜日とか」

Y:「分かりました！あの、勉強量のことのでどのくらいの課題をこなせたら良いか相談しても良いですか？」

L:「もちろん。またメールくれたら良いよ。お墨付きの勉強量をこなせたら思う存分休日を楽しめるかもね。」

こうして陽一君との話し合いは終わり、それから二週間後に彼からメールで連絡があった。

Date: Tue, 14 Apr 2007 21:16:01 +0900 (JST)

From: xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx@docomo.ne.jp

To: matsubara@future-laboratory.com

Subject: こんにちは。

「先生に言われたとおりにコンカレントとタイムスロットを取り入れてやってみたら勉強が続くようになりました！しかもこなせる量も以前より1.5倍ぐらい増えたかもしれません。ようやく僕も勉強のリズムを作れるようになりましたが、やっぱり辛いです。

近々話を聞いてもらえませんか？どうか勉強のリズムが掴めそうなときなので、自分の中にある嫌な材料はすべて解決したいと思っています。よろしくお願ひします。陽一」

それから三日後。彼は事務所にやってきた。

やる気が続かない 後編

L：「メール読みました。早速効果があったみたいだね」

Y：「おかげさまで最初の一週間は非常にうまく行きました。今までで一番効率が良かったと思います。でも・・・」

L：「でも二週間目からまたやる気が減ってきたと？」

Y：「せっかくこの前やる気を継続させる方法を教えてもらったのに申し訳ないですけど、そうですね。二週間目もそれなりに効果はあったんですが、一週間目ほどにはなくなりましたね。」

L：「私が二週間と言ったのには理由がある。陽一君の状況をある程度詳しくヒアリングした上で解決策を提示したので少なくとも1週間は効果があると見ていた。一週間後に報告してもらえれば、私は自分の提案した解決策の効果に自己満足することが出来たはず。でも2週間にしたのは、提示した解決策は今の陽一君にとって一週間以上効果が続かないだろうと予想していたから。つまりメッキが剥がれる時期を見越していたんだ。」

Y：「どうゆうことですか？」

L：「私は陽一君が前回話してくれる中で、二点気がかりなことがあった。ひとつは親御さんのことを聞こうとしたら、それについて嫌な顔をしたこと。もう1つは弟さんの話のときの陽一君の話し方。」

Y：「あまり触れて欲しくない部分です。」

L：「前回私もきっと陽一君は触れてほしくないのだろうと感じました。なので

、それ以外に何か問題があって解決策を見出せるならと思っている話を聞きました。そして時間管理という部分で確かに問題があったのでそれについて効果的な提案をしました。それでダメだったときに”この触れられたくない部分”に切り込んでみようと。2週間はそれを計る良い期間だと。」

Y：「やはり話さないといけないですか？」

L：「前提として、私も陽一君も陽一君の志望校合格というベクトルに向いています。そしていま陽一君のベクトルの方向を不安定化させている要因がある。今私たちはその軌道修正を”一緒に”しなければならないということです。どんなに優れた問題解決能力があっても適切な質問によって情報を引き出さないことには何も生み出すことが出来ない。目の前に見える問題はそのレベルでは解決できないことが多いのです。全く関係の無いことのように思えることこそ進の原因だったりします。」

Y：「でも受験勉強と家庭内の問題は別ではないですか？プライバシーというものもあると思いますが」

L：「私も無碍に陽一君のプライバシーをさらけ出すつもりはないです。ただ”すべてはつながっている”ということです。家庭に限らず学校での人間関係、その他いろいろな問題はつながっています。ある分野だけ状態が良く、他の分野で状態が悪ければ、そのうちすべてが悪くなる。もっと率直に言えば、受験だけをうまく乗り切りたいと思えば思うほど失敗します。」

Y：「・・・・・・・・」

L：「あくまで私は陽一君のサポーターです。主役は陽一君、あなたです。ここで1つ提案させてください。陽一君はどちらを選びますか？このままこの問題に蓋をして効果的な時間管理の手法を使ってそれなりにやっていくか、あるいは

は今ここですべての問題を解決する糸口を見つけ建設的な手順を踏んでいくか。選んでください。」

Y：「先生は解決できる自信はありますか？」

L：「私は陽一君を操作するつもりはありません。なので、この問題を解決したいと考えるなら、私がこの問題を解決することをお約束します」

Y：「僕にとっては裸になるより恥ずかしい話なんです。だから引かないで聞いてもらえますか？」

L：「もちろんです。この問題が陽一君にとって非常に根深く辛いことだとは想像できます。私も誠意を持って話を聞きたいと考えています」

Y：「先生、頭の良さは生まれてきた時点で決まってるものですか？」

L：「私がそう考えると思いますか？」

Y：「いえ。僕は親に昔から弟と比べられてきました。小さいころからずっと。なのでずっと頑張ってきたつもりです。運動は全くダメだったので勉強を頑張り親に認めてほしかった。」

L：「それはいつから気付いたのですか？」

Y：「小学校3年のときからですね。親からは”健一と違っておにいちゃんは何をやっても・・・”と良く言われました。勉強、運動、遊びすべてにおいて僕は弟より劣って見えるんだと。」

L：「弟さんと比較され非常に悲しかったでしょう。」

Y：「僕は生まれてきてはいけなかったのか、いや・・・それは違う」と、いつも自分で自問自答しながら、「弟より僕が優れていることがあるんだ」と言い聞かせ努力してきたつもりです。」

L：「高校入試のときも、その気持ちから地元の進学校を狙ったんですか？」

Y：「そのためだけです。認めてもらうには実績だと思って」

L：「でも高校入試は失敗した・・・。」

Y：「それから親は僕に”お前は どう頑張っても能力が無いのだから無駄なことはするな”と言うようになりました。（陽一は語気を強め）高校入試は本当に頑張ったんです」

L：「努力に努力を重ねた結果、親御さんに言われたその言葉を聞いて居た堪れない気持ちになったでしょう・・・」

Y：「はい。（陽一の目に涙がたまる）これまで自分でも出来るものがあるって頑張ってきたけど結果も出せず親からも”お前は能力ない”と言われ・・・本当に自分は出来損ないかもしれないと思うようになりました。努力しても無駄だった。」

L：「それから一年半ぐらい無気力になったんですか？」

Y：「自暴自棄になってましたね。本当に毎日生きてる感覚が無くて何もする気になれずボーっと過ごしていました。」

L：「今のように将来に向かって立ち向かおうって思い始めたのはどんなきっかけ

けですか？」

Y：「学校の友達に恵まれたんです。一人仲の良い奴がいて、そいつが受験勉強始めたのがきっかけですね。一緒にやろうと言ってくれて」

L：「大切な友達ですね。それは陽一君の人生で最も大事な出会いになると思いますよ」

Y：「バンドが好きな奴で最初何もする気が起きなかった僕を家から引っ張り出してライブに連れて行ってくれて。ホント感謝してます。」

L：「その友人を大切に思うのと同じくらい陽一君も大切に思われているはずですよ。」

Y：「恥ずかしながら僕もそう感じています。( やや元気が戻る )」

L：「でも、友人関係でうまくいってる陽一君を悩ませる親御さんの発言は相変わらずなのですか？」

Y：「相変わらずというか・・・弟の成績のよさや運動神経のよさが僕と比較にならないくらいと思っているみたいで最近は無視されている気がします。もちろん学校に行かせてくれるし参考書も買ってくれるので完全に無視されているわけではないと思うのですが・・・」

L：「フィードバックが無いということですね」

Y：「フィードバックって何ですか？」

L：「相手からの反応・評価です。人間はどんなに物理的に満たされても精神的

に満たされなければ健全ではいけないものです。たとえ、マイナスな評価でも貰わないよりはマシといわれています。」

Y：「まさに今の僕ですね。良く出来たなんて言葉はもちろん一回も貰ったこと無いですが、最近はお前はダメな奴だとも言われません。何もフィードバックがない・・・」

L：「陽一君。やる気向上までゴールは近いですよ。もう少しすれば解決する。そして陽一君は受験に向かって全力で取り組める環境になる。」

Y：「だと良いんですが・・・よろしくお願いします。」

L：「陽一君はどのような状況を望んでいますか？」

Y：「やはりやる気に満ちてバリバリこなせるようになりたいですね。」

L：「親御さんに対してはどうですか？」

Y：「そうですね。先生の本と出会って、能力・学力は自分で形作ると学びました。その機会を親が奪ってきたという意識があります。親には謝ってほしいですね。そしてやっぱり応援してほしい。」

L：「私から見て、陽一君の親御さんは陽一君のことを信用していると思いますよ。」

Y：「どうゆう意味ですか？」

L：「つまり陽一君の成功を誰よりも望んでいるということです」

Y：「そんなことはあり得ません。だったらなんで応援するどころか邪魔をするんですか・・・」

L：「あくまで客観的な事実から見て、ですよ。本当にそれがあり得ないなら誰が学費を払うでしょうか？しかも私立です。結構学費が高い上、うちのロジックにも入会させてくださっている。さらに高校卒業後は就職ではなく大学進学を望まれている。誰が期待しない人間にここまで先行投資するのでしょうか？」

Y：「でも・・・」

L：「きっと愛情表現が苦手なだけな気がします。でも、それが少し間違った方向に行き過ぎている。相対評価という形でね。」

Y：「相対評価？」

L：「その代表例が偏差値です。全体の中で自分の位置を示すもの。陽一君の場合は弟さんとの比較という形で現れています」

Y：「最近はそれすら無いですけどね・・・」

L：「人間はみんな一人一人が唯一無二の絶対的な存在です。それを忘れ、みな他人との評価を自分の拠り所としてしまっている嫌いがある。確かにそれは社会を生きていく上ではある程度は必要です。しかし自分の一度しかない人生に関わることに、この相対評価を真ん中に置いて良い結果が出るはずも無い。」

L：「陽一君の親御さんは陽一君の幸せな人生を願う方法として、誤って相対評価をしてしまった。そしてこれは非常に陽一君を悲しませた」

L：「その点に置いて、陽一君の親御さんの非はあるでしょう。でも忘れていけないのが、その相対評価、弟さんとの比較の源泉は陽一君の幸せを願う気持ちから来ていたと思います。」

Y：「どうですかね・・・」

L：「確かに陽一君の親御さんとこの件について話し合った訳ではないので100%そうとは言い切れませんが、ほぼ間違いないでしょう。」

Y：「(先生はなぜそこまで・・・) どうすれば親は自分に謝ってくれるでしょうか？ そうすれば解決する気がします」

L：「陽一君はホントに鋭い感性と知性を持ち合わせていますね。そう、このやる気が出ない問題解決の糸口は陽一君と親御さんとの人間関係の転回にあります。」

Y：「それでどうすれば・・・？」

L：「簡単です。陽一君から謝ることです。」

Y：「え？ 僕が謝る？ 僕は被害者ですよ。なんで僕が親に謝らなくてはいけいないんですか？ 先生には分かってもらえてると思ったのに。」

L：「もちろん分かってますよ。だからこそ、提案するのです。ただ謝る内容はこうです。”今まで僕を信じて投資してくれたのにそれに気付かなくてごめんなさい。これからは感謝の気持ちを持って結果で恩返しします”」

Y：「分かるような分からないような内容ですね。」

L：「今回のこの問題はボタンの掛け違いがそもそもの原因です。そしてそのボタンの掛け違い、つまり相対評価してしまった親御さんの行動・言動は陽一君のことを思う親心に由来している。本来陽一君に非はありません。なので謝る必要が無い。でもこれまでの人間関係を転回させるには”理解して理解される（ 1 ）”という原則を実行しなくてはなりません。」

Y：「つまり自分のことを分かってもらえるためには親を理解しろということですか？」

L：「そうです。陽一君がそのような誠実な態度を取れば、親御さんは最初は戸惑うかもしれませんが、綺麗な議論にはならないかもしれない。でも結果として必ず良い方向にベクトルが向いていきます。」

Y：「”今まで僕を信じていろいろしてくれたのにそれに気付かなくてごめんなさい。これからは感謝の気持ちを持って結果で恩返しします”、かぁ。」

L：「やってみますか？」

Y：「これしか方法は無いのですか？」

L：「一番良いのは親御さんから陽一君へ”誤り”だったと言ってもらうことですが、それがいつあるのか分かりかねますね。しかも入試は来年の1月から始まるわけです。であれば今のうちに転回させる必要がある。そのためには今自ら動く、つまり親御さんの気持ちを今理解しようとするのが一番現実的だと言えます。」

Y：「理解して理解される。やってみようかな。失敗してもちょっと変な奴扱いされるだけで終わりそうだし、そうゆうフィードバックがあれば今より少しは改善されるんですよね？」

L：「その通り。今は何のフィードバックも無いのだから。リスクは無いですよ。そればかりかこれで転回出来れば陽一君の対人能力のレベルが格段と上がると思います」

Y：「”改善”を”転回”に出来るも出来ないも自分次第ですね。」

L：「やれば必ず状況は良くなる。リスクも無い。聡明な陽一君の判断を期待しています。」

Y：「早速今日やってみます。気持ちをこめて謝ることはできないかもしれないけど。」

L：「気持ちをこめなくても大丈夫。”今まで僕を信じて投資してくれたのにそれに気付かなくてごめんなさい”。この言葉を言うことだけを考えてみてください。気持ちは後から付いてくる！」

Y：「どうゆう意味ですか？」

L：「やればわかりますよ。」

陽一君が事務所に来る前に、実は陽一君のお母さんから電話があった。今日陽一君が事務所に来ることを事前に察しての電話であった。

陽一君のお母さんからは「自分の息子だから頭が悪いのでどうにか大学に行かせてくれるよう指導をお願いします」とのことだった。

陽一君のことを想えばこそその「この言葉」がボタンの掛け違いを生んでいることを物語っている。今回の問題における私の役目は、そのボタンの掛け違いを教

えることだけだった。親子だから分かり合えないこともある。だからこそ子の想い、親の想いの架け橋としての役目が大事なのだと私は考えている。

数日後、彼からメールが来た。

Date: Tue, 29 Apr 2007 23:19:01 +0900 (JST)

From: xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx@docomo.ne.jp

To: matsubara@future-laboratory.com

Subject: 夜分にすみません。

「先生に言われたとおりに親と話し合いました。私が謝ると親は最初私の真意を疑ってましたが、なんと親からも”今まで知らずに傷つけてしまった”という言葉が・・・結局謝ってもらうことは出来ませんでした。親がこんなにも自分のことを思ってくれていたのかと思うと、自分が悩んでいたのが少し馬鹿馬鹿しくなりました。しかも高校に入って自暴自棄になったにもかかわらず自分で再び立ち直ったときは安心したそうです。すばらしい友人に出会えるほど成長したお前に何も言うことは無いと思っていた、とのことでした。おかげさまで今目の前が一気に明るくなった気がします。この前教えてもらった時間管理の方法も慣れてきて、かなり調子が良いです。ありがとうございました！！で、早速なんですがやっぱり英語がネックなんです。勉強量はそれなりだと思いますし、英単語も文法もかなりのレベルのものも覚えています。でも長文がさっぱりで・・・辛いです。近々話を聞いてもらえませんか？どうにかやる気が安定化してきた今のうちに成長の波を掴みたいと思っています。よろしく願います。陽一」

翌日彼は私の事務所にやってきた。明るい表情で。

英語の成績が一向に上がらない

L：「メール読みました。早速効果があったみたいだね」

Y：「って先生の開口一番の言葉はいつも一緒ですね。おかげさまでやる気に満ちてヤバイ位燃えています！！でも・・・ってこちらも同じような返し方ですが」

L：「英語がネックみたいだね。まあ前向きな悩みだけど（笑）」

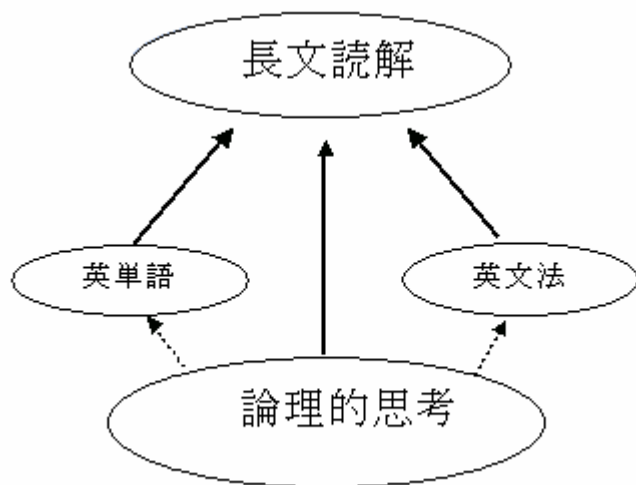
Y：「結構自分では勉強しているつもりです。単語も文法も人一倍覚えているつもりですが・・・」

L：「Pert 図って知ってるかな？」

Y：「いえ。聞いたこともありません。」

L：「名前は聞いたことは無いかもしれないね。でも自然と頭の中で陽一君も考えていることだよ」

L：「早速この図を見て欲しい。」



Y:「僕の理解からすると、英単語と文法が出来て初めて英語長文が分かるようになる感じですか？」

L:「まさにその通り。英語長文を読めるようになるための先行条件が英単語と英文法になる。この図を無意識に考えているから今陽一君は英単語と文法を勉強してるんじゃないかな？」

Y:「そうですね。東大の問題を見ると英語長文は出来て当たり前。さらにリスニングも一分間に150文字処理できないと解けないから、ある意味それも長文問題ですよ」

L:「この図の下部にある論理的思考というものが非常に重要な要素だけど、思考の前提となる知識、つまり単語と文法が無ければ何も理解することは出来ないね。」

Y:「でもこれって当たり前のことですよ？」

L:「理屈の上ではね。」

Y:「僕はずっとこの図の中にある関係図を信じて英語を半年以上も勉強していますが、一向に読める気がしないです。」

L:「この図は論理的には正しい真実だよ。でも人間は理屈だけで物事が上手く運ぶとは限らない。」

Y:「意味深なこと言いますね。そこに僕が英語長文を読めない理由がありそうですね」

L:「まずは現状認識から始めよう。ここに二種類のテスト、英単語テストとセンタータイプの確認テストがあります。これをやってみて。」

ここで一端話すのを止め、陽一君にテストを回答してもらった。  
私はその回答を分析して、彼の英語力は”典型的な低迷のタイプ”であることが判明した。あなたが英語を苦手と思っているうなら自分が当てはまらないか確認して欲しい。

L:「結果が出ました。」

Y:「どうでしたか？」

L:「結構面白いデータが取れましたよ。」

Y:「面白い？具体的にはどうゆうことですか？」

L:「まずセンタータイプの問題からね。この問題の陽一君の回答結果には二つの特徴がある。まず文法問題。これは完答しているね。良く勉強していると思います。一方、長文問題。これは正答率10%程度。しかも3問のうち1問は

中学レベルの単語を使用した比較的平易な文章でも得点率は20%だった。総得点は42点(200点中)。」

Y：「長文は正直嫌いです。」

L：「単語テストの方も面白い結果が出てる。中学レベルの単語の意味の正答率が80%、高校レベルの正答率は95%。まとめると陽一君は文法と英単語の高度な知識を持ちながら、英文が読めないということになるね。」

Y：「自分なりに精一杯やってます。単語なんかすぐ忘れるから何度繰り返したとか・・・」

L：「確かに努力なしで高校の英単語正答率95%や文法問題完答はありえない。ここで何か気付かないかな？」

Y：「あれ？僕って文法も単語もクリアしているのに長文がダメってことはあの図は間違いなんですか？」

L：「良く気付いたね。あの図は論理的には正しい。でもあの関係図を満たすだけでは望む結果は得られないんだ。」

Y：「じゃあどうすれば良いんですか？」

L：「ヒントは中学レベルの単語正答率が80%、中学レベルの長文の正答率20%かな」

Y：「どうゆうことですか？」

L：「英語という科目は他科目と違って潰しが効かない科目なんだ。例えば数学

は中学レベルがあまり分からなくても高校数学から手をつけて学習すればある程度得点は取れる。でも英語はそうは行かない。英語は文化だからね。正統な手順を踏んでひとつずつ誠実に向き合って理解していく必要がある。それを飛び越して安易な方法に走ると、なかなか英語に振り向いてもらえない。」

Y：「僕の勉強方法は安易な方法？」

L：「陽一君が自ら望んで安易な方法を選んでいると言ってる訳じゃないんだ。結果として知らないうちにそうなってしまっているということなんだ。」

Y：「英語の正当な学習方法って何ですか？」

L：「それを見出すヒントがさっきも言ったけど”中学レベル単語正答率 80%：中学レベル長文正答率 20%”だよ。」

Y：「高校の単語や文法は関係ないんですか？」

L：「もちろん関係あるよ。でも、陽一君の英語長文が分からない直接的な原因は高校レベルではない。中学レベルだよ。」

Y：「でも中学レベルも 80%はクリアしてます。」

L：「そこがポイントだよ。つまり 80%の単語力が英語長文の正答率 20%を引き起こしてる。」

Y：「? どうゆうことですか？」

L：「これは実に良く受験生にありがちな現象なんだ。80：20の法則って知ってるかな？」

Y : 「いえ。分かりません。」

L : 「約 100 年前イタリアの経済学者ヴィルフレード・パレートという人が発見したといわれてるんだけど、「原因と結果、努力と報酬の間には、必ず不均衡が生じ、その割合はおおよそ 80 対 20 となる」という法則のことなんだ。」

Y : 「それが今回も当てはまるってことですか？」

L : 「そうだね。少なくとも英語の長文が分からないという人の大半がこの中学英単語の習得率に起因している。」

Y : 「8 割じゃダメってことですか？」

L : 「はっきり言えばそう。中学英単語は 100% にしなくてはダメ。少しでもこのレベルに抜けがあると様々な弊害が起きるんだ。想像以上にね。」

Y : 「具体的にはどんなことがあるんですか？長文が読めない以外に。」

L : 「まず勉強が捗らないよね。このレベルの単語でつまずいていると辞書で調べる回数も多いので文法を学ぼうにも、まずは例文の単語を調べるところから始まる。」

Y : 「確かに。僕は中学レベルの英単語はグラマーの教科書の基本例文で分からない度に辞書を引いてました。辞書を引きながら覚えれば良かったけど」

L : 「凄く時間がかかるでしょ？」

Y:「そうですね。でもそれは必要なことなんだって思っていました。例文の中で覚えた方が記憶持ちがいいって皆言ってますし。」

L:「その学習法は中学レベルを完璧にした以降の話だよ。そのレベルの単語を調べていては何年かかっても英語が分かるようにならない。」

Y:「じゃあ様々な弊害というのはすべて英語の理解を妨げる原因になるんですね」

L:「その通り。思い返せば初めて英語を習ったとき英単語だけを教えてもらったでしょ？いきなり最初から文章を訳させられることはなかったはず。」

Y:「確かに中学一年ではじめて習ったとき apple という単語から教えられた記憶があります」

L:「皆が批判する学習指導要領て実は結構有効なんだよ。何十年も体系だてて教えられてきたものだしね。私はそんなに悪いとは思わない。ただ現場との乖離が問題であって、ね。」

Y:「先生から学校教育を支持する意見が飛び出すとは・・・」

L:「話を戻すけど、結局中学レベルの英単語は丸暗記で覚えきることが大事なんだ。そうすれば80:20の法則を崩すことになり英語長文が見えてくる」

Y:「まだ良くその仕組みが分かりません。」

L:「中学レベルの英単語を学ぶとします。すでに陽一君は高校レベルの単語も高い習得率なので、それに拍車が掛かり受験レベルの英単語もそう時間がかからず覚えられるようになる。規則性が見えてくるからね。そうすれば英文法の

学習では「英単語ではなく文法事項」に集中できるので、理解が深まってくるよね。こうなってくれば中学レベルの英語長文にも取り組みやすくなり、文章の論理的な読み方を参考書で学んでいけば英語理解の基礎が作られる。その基礎が出来ればさらに難しい文章が読めるようになっていく。」

Y:「なるほど。でもひとつ腑に落ちないことが・・・80%の理解が駄目で100%にする必要がある。100%って80:20に当てはまらない気がします。80+20が100ってこと??分からない・・・」

L:「簡単に言えば大学受験に必要な英単語は派生語を含めて5000語って言われている。そのうち中学英単語は1000語。じゃあ問題ね。5000語の中の1000語って何%ですか?」

Y:「・・・20%! そうゆうことか! 僕の中学英単語の習得率は80%だから800語、つまり16%しかなかったのか。大学受験の総単語5000語の16%を20%にすることが、中学英単語の80%を100%にすることにつながる! ということですね?」

L:「よく理解しています。すばらしい。これまでの話をまとめると、中学英単語 中学レベル文法 中学レベル英語長文・論理的な読み方で英語の基礎が出来上がれば、難度の高い英語長文を読んでいくことで高校レベル・受験レベルの単語と論理的な読み方が出来てくるということなんだ。」

Y:「あれ? 高校レベルの文法はどうなるんですか?」

L:「はっきり言って長文読解では中学レベル以上の文法は不要だよ。ただ関係代名詞や分詞、不定詞などの項目は中学レベルといえど難しい仕組みなのでしっかり理解しておく必要がある」

Y：「センターの文法問題や英作文には高校文法は必要だと思いますが？」

L：「そうだね。でもその文法問題って言われるものは付け焼刃でどうにでもなる。実際陽一君は今の時点でほぼクリアしているよね。」

Y：「仕組みが見えてきました！でも高校レベルの単語力が不足している人はどうすれば良いですか？この前話した僕の友達、英単語暗記に苦戦してるみたいで・・・」

L：「さっきのまとめの話でも言ったけど、もっと分かりやすくアドバイスしよう。中学レベルは丸暗記、高校レベルは長文を訳していく中で覚える。もちろん高校レベルの必須単語すべてに遭遇できないかもしれないので、ある程度入試レベルの長文が読めるようになれば英単語帳で確認すれば良いよ。たぶん数時間ですべての単語をチェックできるんじゃないかな。」

Y：「長文で覚えた英単語がすでに頭の中にあるから、馴染みやすいということですね？」

L：「陽一君は飲み込みが早いな。付け加えて言うと、陽一君が覚えている高校レベルの単語の記憶はまだうる覚え状態だと思うんだ。結構何度も復習していても忘れやすいでしょ？」

Y：「先生の言うとおりです。結構ウンザリしますね。」

L：「でも大丈夫。いま言ったやり方でやっていけば、そのうる覚えな知識が明確で強固な知識に変わっていくから。」

Y：「長文を訳していくときに使うからですね。」

L : 「はい、私はもう何も言うことはありません（笑）」

Y : 「まずは中学英単語かぁ。頑張るぞ。そう言えば午前中に受けたセンタータイプの問題、全体の得点率って計算すると・・・42点だから21%ですね」

L : 「ん？」

Y : 「いや、さっき先生が教えてくれた80:20の法則。ここでもかなり20%に近い数字だなぁと思って」

L : 「鋭いね。英語の入試問題は今や長文主体だからね。どんなに文法事項で得点を挙げても、長文問題が全体の配分点を吸収してしまうんだね」

Y : 「なんか不思議な法則ですね。この法則からは逃れられないのか（笑）」

L : 「宇宙の法則という人もいるね。この世の（あるいは宇宙の）あらゆるところに当てはまるものと言う意味でね。」

Y : 「論理だけでは物事はうまくいかない、かぁ。なんか凄いです」

L : 「長文主体にした張本人がこの社会、世の中のニーズだからね」

陽一君はやる気に満ちた顔で事務所を後にした。

科目が多すぎて手に負えない

数日後、彼からメールが来た。

Date: Tue, 10 May 2007 23:19:01 +0900 (JST)

From: xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx@docomo.ne.jp

To: matsubara@future-laboratory.com

Subject: またまた夜分にすみません。

「先生に言われたとおり中学英単語をマスターしたら凄いはかどって英語は僕のものだあってぐらいに順調に進んでいます。この前のセンタータイプの英語長文も3問中2問はほぼ読めるようになりました。論理的な読み方の身に付ける方法は先生の本を参考に、教えてもらった本で勉強しています。

で、また相談なんですけど近々話を聞いてもらえませんか？どうにか英語が見えてきたら他の科目のことも気になり手を付け始めたんですが、科目が多すぎてとてもとてもこなせる量じゃありません。どういった進め方でやって行けば良いのかアドバイスを貰えたら嬉しいです。よろしくお願いします。陽一」

再び彼は私の事務所にやってきた。

L：「メール読みました。どんどん前向きな悩みになってきたね」

Y：「う～ん、確かに前よりはるかに積極的になりましたね。これも先生のおかげというより自分の才能がやっと開花したかなって感じですよ（笑）」

L：「もう私は何も言うことはないね・・・。お出口はあちらになります」

Y：「じょ、冗談です（汗）助けてください・・・」

L：「いや、それは出来ないな。今までだって一度も助けたことは無い。雄一君

はすべて自分で解決してきたんだよ。私は少しお手伝いしただけ。これホント」

Y：「先生がいろいろ僕を引き出してくれてるとするのはスゴイ感じます。何かいつも話し終わるとスッキリすると言うか清々しい気持ちにさせられます」

L：「それはね、私と雄一君が、いや（思わず間違えた）陽一君が二人で相乗効果を発揮したからだよ。1 + 1を3に出来たということ」

Y：「そうなんですか？」

L：「そうだよ。たとえどんなに優れた問題解決能力を持っていたって、その問題について深く知ることが無ければ何も生み出すことは出来ない。」

Y：「なるほど。つまり僕が先生に深く理解されて始めて良い解決策が生まれるということですね。」

L：「そう。まさにその通り。誤解の無いように言うなら、その優れた問題解決能力とは私だけでなく、陽一君も合わせた相互作用を指す。特に陽一君の”現状を打破したい”という感性の部分がね。」

Y：「じゅあ二人は共同体みたいなものですね。少なくともチーム員！」

L：「そう、陽一君がリーダーとして方向性を示し、私はマネージャーとしてその方向性を現実化して行くイメージかな。つまりマネージャーはその方向性を実現するためのサポート役ね。」

Y：「じゃあマネージャーさん、今回の問題を一緒に解決していただけますか？」

L：「ええもちろんです。お力添え出来るか分かりませんが、精一杯頑張らせて頂きます」

Y：「いや、頑張らなくても良いですので必ず結果を出してください。それがあなたの使命です。人の呼び名を2回間違えたことは許しますが、結果を出せないという間違えだけは犯さないでください」

L：「(あれ?一回だけじゃなかった?間違えたの・・・)陽一君て実は結構なサディスト?」

Y：「恐れ入ります。」

L：「(・・・)さて、本題に入ろう。今回の悩みは勉強する科目が多すぎて手が回らないということだったよね?」

Y：「そうなんですよ・・・。やる気も持続するようになったし一番ネックだった英語も希望の光が差してきたのに、また問題発生です。」

L：「本当に良い傾向だね。問題が起きない場所は確かに居心地は良いけど、進化が無いし成長も無い。そんなのは生きてる意味がない」

Y：「じゃあ問題発生は歓迎するべきですね?」

L：「そうそう。そういう考えがあれば必ず問題は解決できるし、さらに進化できる。当然また問題は発生するよ。でもその度ごとに陽一君は成長し続けるんだ。」

Y：「じゃあ今こんなに悩んでいることは無駄じゃないんですね。大学受験なんてささっと終わらせれば楽でよいのって思ってたんですが・・・」

L:「無駄どころかそれが全てだよ。だから面白いんだ。そのプロセスで学べる  
こと・成長できることは他の誰でもない、陽一君だけが経験できる唯一無二の  
糧になる。それが自分の存在意義を形作っていく。」

Y:「分かりました！どんな問題でもウェルカムです。でももう少しだけ僕に力  
を貸してください。問題が起きても絶対解決していく覚悟です」

L:「もちろんだよ。具体的には何の科目に梃子摺(てこず)っているのかな？」

Y:「全科目です。特に二次試験の英語、数学、国語と日本史、地理をどう上手  
くこなしていくか。これが悩みです。」

L:「今どんなスケジュールでこれら5科目を回してるのかな？」

Y:「いや今は英語と日本史以外全くどう手をつけたらよいか分かりません。」

L:「じゃあ数学、国語、地理は手付かずなのかな？」

Y:「そうですね。今は全く手を付けていません」

L:「確かに大変だよ。でもどれもすべて二次試験に必要なもの。こういった”  
あれもやらなくちゃこれもやらなくちゃ”って時に有効なスケジュールの考え  
方があるよ」

Y:「どうゆう考え方なんですか？」

L:「”重要度”と”緊急度”という二つの軸で捉える考え方だよ」

Y：「良く分かりません。」

L：「ここでは科目を以下の図の四つのグループに分けるんだ」

	重要度低い	重要度高い
緊急度低い	4	1
緊急度高い	3	2

Y：「この重要度と緊急度って具体的には何を指すんですか？」

L：「重要度は2つある。ひとつは入試における配点の高さ。もうひとつは得点の伸びやすさ」

Y：「じゃあ東大の配点の高さだったら国語 = 英語 = 地歴 2 科目 > 数学ですね。あと得点の伸びやすさは地歴 > 英語、国語 > 数学って感じですか？」

L：「さすが良く分かってるね。東大数学は得点のしやすさから言えば一般的には低いといえるだろうね。一部の特別な人を除いて」

Y：「東大国語って先生のやり方なら結構得点上がりやすいですしね。」

L：「国語は英語より得点も上がりやすいし時間も掛からない。」

その点で国語>英語だね。つまり重要度の高い順から並べると地歴>国語>英語>数学になる」

Y:「でも地歴がトップに来るなんて。普通英語とか数学が最も大事って言われてますよね?」

L:「志望する大学の科目状況によっては変わってくるということだね。あくまで受験は総合点勝負だから。では次に緊急性について。」

Y:「どれも緊急ですよ。もう来年の試験まで10ヶ月切りそうです」

L:「でもこの緊急性が非常に大きな意味を持つ。確かにどれもある程度緊急性が高いけど、もっと厳密に見出さないといけない。緊急度の順位をね。そうしないとすべて共倒れになってしまう。逆に、この緊急度と重要度の軸で見出したスケジュールを実行すれば、すべて上手く回るようになるよ。」

Y:「厳密に見出すってことは何か緊急性を見る基準であるんですか?」

L:「あるよ。それは科目得点の上がりにくさだよ。上がりにくいほど緊急度が高くなる」

Y:「あれ?それって重要度を測るときの2番目の要素のことですか?」

L:「良い質問だね。重要度の”得点の伸びやすさ”は志望大学特有の入試問題に対するもので、この緊急度の得点の上がりにくさは科目そのものの本来的な性格に焦点をあわせたものになるんだ。」

Y:「じゅあ例えば標準的な数学は得点を取り易いですよね?僕の経験上でも一番早く点数が上がり始めたし模試でもすぐ点数が上がり始めました。その点で

は伸びやすいので数学の緊急度は低い？」

L：「そうだね。結局伸びにくいというのは成績が上がるまで時間が掛かるということなんだ。だから数学の科目特性から数学は緊急度が低い。しかし重要度の得点率の高さから言えば東大数学は難しいので重要度も低い。実際科目配分も他科目の120点に比べ80点しか与えられていない」

Y：「じゅあ数学は4に所属するということですね？」

	重要度低い	重要度高い
緊急度低い	4	1
緊急度高い	3	2

L：「その通り。じゃあこんな感じで他の科目も見出してみて。」

ここで陽一君と分析した他科目のグルーピングは以下の通りになった。  
ぜひあなたもご自分の志望大学の科目を分析してみたい。

英語 グループ 2  
 国語 グループ 1  
 地歴 グループ 1  
 数学 グループ 4

Y：「先生、国語と地歴は同じグループですね。」

L：「どっちがより緊急度が低くて重要度が高いと思う？」

Y：「緊急度の低さは地歴ですかね。覚えることと理解していくことの量は国語のそれより多いと思いますから。一方、重要度に関してはそこまで差が無いような気がしますね。つまり地歴 > 国語だと思います」

L：「陽一君はどんどん成長しているなあ。実はこういった緊急度と重要度を数値化するツールがあるんだけど、説明が煩雑でやや難しい内容になってしまうから今回は説明は省くね。ただこの2つの指標は大まかな分析でも十分に効果が出るんだ。今の陽一君の分析で20%はクリアできている」

Y：「たった20%ですか？残りの80%の精度は無視ですか？」

L：「作業レベルでの話ね。厳密な数値化を行った場合は、この何倍も時間と労力が掛かる。でも出てくる結果には差異はほとんどない。大学受験の求める入試科目程度の分析には残りの80%は不要ってことだね。」

Y：「なるほど。でも必要な場合もあるんですよね？」

L：「大学受験でもモチベーション低下の原因や、置かれた環境の分析などは厳密な分析が必要になるね。でも今回の陽一君の悩みには無用ってことだね」

Y：「分かりました。要は20%の分析作業が80%の無駄を省く、ということですね。」

L：「おお確かにそうだ！」

Y:「じゅあやっぱり英語に一番力を入れるべきですね。英語中心のプランにしないと・・・」

L:「いや違うね。」

Y:「英語は上がりにくいから早くしないと間に合わなくなりますよ?しかも試験配分も得点率も高いですよ?」

L:「スケジュールをこなすコツはまず”緊急じゃないけど重要なもの”を中心に置くことなんだ。つまりグループ1の国語と地歴」

Y:「これを先にやる?なぜですか?」

L:「緊急度が高く重要なものって必ずやるよね?でも重要なものでもそこまで緊急性がないものって人間の性格上結構後回しにしてしまうんだ。この観点が抜けたプランにしまうと、つまり、地歴と国語をやらなくなる、少なくともやりずらくなるスケジュールにおのずとになってしまうんだな」

Y:「つまり結局は自分の特性を見越してプランニングする必要があるということですね?」

L:「その通り。」

Y:「でもそうなるが一番大事な緊急かつ重要な英語を疎かにしてしまう可能性があると思うんですが?」

L:「そうなる人間は知恵を絞り始めるんだ。まずは国語・地歴と英語、そして次に数学もどう上手くこなしていくか、ってね。」

Y：「そしてその知恵を僕に教えてくれる・・・と。そうゆうことですね？」

L：「まあ教えてくださいというスタンスも必要だね。”愚者は自分でできると考える。賢者は先人の知恵から学ぶ（ 3 ）”ってね」

Y：「これって一日の時間の使い方に一番応用利きそうですね。」

L：「まさにそう。ホント鋭いね。入試から逆算したら一年や半年、一ヶ月、一週間まではスケジュールって見えてくるからね。」

Y：「いつもそこから失敗します。僕は一ヶ月の勉強量から2週間単位までブレイクダウンするんですが、次に2週間の量から一日に換算すると・・・うまくこなせなくなるんですよ。2週間で見たら十分こなせそうな量なんですが、一日に落とし込むとうまくいかない。」

L：「その悩みはかなり高度なものだよ。それだけ陽一君が誠実に受験に向き合っているということだね」

Y：「ありがとうございます。やはりどうしても合格したいですからね。」

L：「じゃあ最後に上手な一日の勉強法を教えるね。これは今までの総復習になるかな。しかも結構分かりやすいから即効性もある」

Y：「先生の提案で僕にとって取っ掛かりやすいものばかりだから助かります。しかも必ず効果がある」

L：「それは私が優れているからではなく、じっくり陽一君を知った上で提案しているからだと思うよ。詳しく知ればこそ、その内容から陽一君が実行しやすい

くて効果がある提案を教えることが出来る。私だけでは導き出せない。陽一君だけでも導くには時間が掛かると思う。でも二人が力を合わせれば優れた案が比較的すぐに導き出せる」

Y：「相乗効果ですね」

L：「では最後の相乗効果と行きましょう！」

Y：「最後になると良いんですが（笑）」

L：「陽一君にとって英語 = 2, 国語 = 1, 地歴 = 1, 数学 = 4 でした」

	重要度低い	重要度高い
緊急度低い	数学 4	地歴 国語 1
緊急度高い	3	英語 2

L：「ここで、毎日するものとししないもの、思考するものと作業のものという観点を取り入れます。」

Y：「なんかややこしいですね。」

L：「毎日するものは重要度の高いもの、しないものは重要度の低いものを指し

ます。」

Y：「じゃあ英語と国語、地歴は毎日するもので毎日しないものは数学になりますね」

L：「そうだね。次に思考と作業。これは字のごとく思考力を大きく使うものと単純作業的な暗記物で分けるんだ。」

Y：「じゃあ英語も内容によって分ける必要がありますね。文法や単語は作業で長文読解は思考に当たります。国語も現代文の読解と古文単語は作業で、一方読解は思考になる。古典は暗記的色彩が強いかな」

L：「国語に関してはその考えで良いね。英語はその時の状態によるかな。陽一君の場合は単語や文法の暗記より思考の読解問題を見ておけば良いね」

Y：「地歴はどっちでしょう？」

L：「東大は単なる知識を問うことはあまりないね。特に日本史なんかは知識量でいえばセンター試験より少なくとも良い。その時代背景、因果関係を掘り下げていくと言う意味では思考になるね」

Y：「数学は？思考ですか？」

L：「数学は理解しながら暗記していくから思考だね。単純作業ではない。これまでの話をまとめて見よう」

毎日する	思考	英語 現代文 地歴
	作業	単語 地歴(暗記)
しない	思考	数学
	作業	古典

Y：「毎日するものが多いですね・・・」

L：「結論から言えば現代文は比較的すぐクリアできるし、英語も長文読解が完成すればそんなに時間は掛からない。逆に言えば、英文読解と現代文が終わらなければ他の科目をやるのは避けたほうが良い」

Y：「地歴はどうですか？」

L：「地歴も因果関係や背景はそんなに量は多くない。ただ暗記項目と同時に因果関係に関する洞察を深めていく必要がある。」

Y：「あと、毎日やる場合、こういった順序でやれば良いですかね？」

L：「ヒントはコンカレントワーキングとタイムスロットマネジメント、つまり思考と作業と休憩を織り交ぜていくんだ。」

Y：「じゃあ思考の英語を 60 分やったとして、休憩を挟んで次に単語をやる。これも 40 分ぐらいやって、休憩のあとに現代文をやる。これは 90 分以上掛かりそうだったので 90 分で途中で切り上げ、休憩後に地歴の暗記物をやる。これも時間が掛かり 90 分で切り上げ、休憩後に地歴の因果関係を勉強して・・・はぁはぁ・・・休憩してても疲れますね。」

L：「根性だ！！」

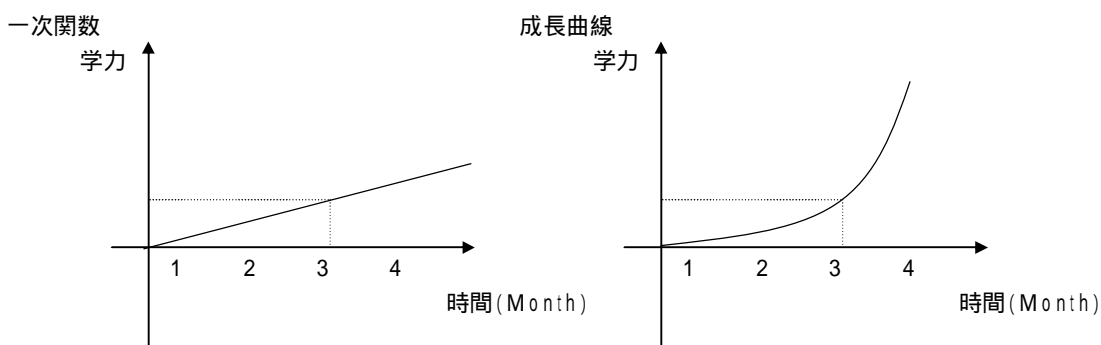
Y：「先生に一番似合わない言葉ですね（笑）」

L：「まゝ実際は毎日やるものでも変化していくんだよ。確かにこれじゃいつ数学を勉強する時間が来るのかわからないよね。でも現代文や英語長文は学習を

進めていくと、ある一点から一気にレベルが向上するんだ。」

Y：「成長曲線。確か本でも書かれてましたよね。」

L：「その通り。一次関数的な右肩一直線で上がっていくのではなく、低空飛行が続いて、ある一点から一気に上昇するんだな」



L：「そうなる最初時間が掛かっていた英語と現代文の時間が減っていく。その分地歴や数学に時間が使えるようになって来る。」

Y：「なるほど・・・じゃあ最初のうちは”毎日しない”数学や古典には時間を費やせない状況もありうる、ということですね？」

L：「その通りだよ。ただ数学は現状のレベルによって毎日する方に配置させる必要が出てくる。」

Y：「具体的にはどうゆうときですか？」

L：「東大は数学の配点が少ないとは言え、中学レベルの因数分解・二次関数すら危うかったらやはり毎日やる方に置くしかない。」

Y:「そういうことですね。僕は数学に関しては偏差値 50 は取ってるし数学 1A レベルまでなら基本事項は大体分かります。なので毎日しない方で良いんですね。」

L:「数学に関しては苦手な人も多いので、陽一君の友達にそういう人がいたらアドバイスしてあげると良いよ。」

Y:「ホントありがとうございます！！自分の動かし方が分かった気がします。」

L:「陽一君も志望校合格 T(チーム)のリーダーとして相応しくなったね。」

Y:「最初はやる気の問題で頭がいっぱいでしたけどね(笑)」

L:「徐々に悩みも前向きになって、こちらとしても遣り甲斐があったよ」

Y:「これからもよろしくお願いします。」

L:「こちらこそよろしく！リーダーの補佐が出来るようマネジメント業頑張ります。」

Y:「まゝ頑張らなくても良いので結果だけは出してください(笑)」

彼はその後驚異的な成績の伸びを実現し、無事第一志望に合格。だがその後再び私に相談に来た。

その話はまた今度。

## 【引用元について】

### 1

陽一君のことを詳しく知ろうとする中で触れられたくない部分を聞かれたとき彼は少し表情を変えた。その理由が何なのか全く分からない状態でヒアリングしても効果は薄い。むしろ本当に触れられたくない部分をかき乱すことで心を閉ざしてしまう可能性すらある。ここはじっくり彼の表情と会話の中でその糸口を探すしかない。ポイントは焦らないことだ。早く解決策を得たいがために安易な方法に走ればすべて無意味になる。焦らず、早急に解決したい気持ちを抑えながら徐々に詳しく知っていこうとすることで最大の効果が得られる。

“理解してから理解される”

この原則の引用元は「7つの習慣(スティーブンR. Covey博士著, 光文社出版)」である。問題解決策を練る上で相手を深く知るということは最も重要なプロセスである。

### 2

「なぜか『仕事ができる人』の習慣(PHP 研究所)」の中で奥井規晶氏が提唱されている仕事段取り術「三倍速時間管理術」の中の概念。本書には示していないが「百ミツの法則」という方法の3つが「三倍速時間管理術」の根幹である。百ミツの法則は“仕事の優先順位の高いものから三つだけに大きな力を注ぐ”というものです。

### 3

中小企業の経営者から圧倒的な支持を受けている神田昌典氏の言葉。

これに関連して、“守・破・離”という考え方がある。

(引用元 <http://www.showen.co.jp/denseihp/syuhari.htm>)

『守』

最初の段階では、指導者の教えを守っていきます。

できるだけ多くの話を聞き、指導者の行動を見習って、指導者の価値観をも自分のものにしていきます。学ぶ人は、すべてを習得できたと感じるまでは、指導者の指導の通りの行動をします。そして、指導者が「疑問に対して自分で考える」と言うことが多くなったら、次の段階に移っていきます。

『破』

次の段階では、指導者の教えを守るだけではなく、破る行為をしてみます。自分独自に工夫して、指導者の教えになかった方法を試してみます。そして、うまくいけば、自分なりの発展を試みていきます。

『離』

最後の段階では、指導者のもとから離れて、自分自身で学んだ内容を発展させていきます。

## 「受験の先に」

### 0 . 始めに

これから始まる文章は松原自身の経験をもとに書いています。

拙著「偏差値 29 からでも 180 日間で東大・早慶大に合格できる究極の方法 ( エール出版社 )」に収録した「受験が与えてくれるもの」の続編で著者が偏差値 29 の学力から早稲田大学に合格したあとに出会った一人の友人との実経験を綴っています。その出会いを通じて、自分の命が活かされていること、否生かさねばならないことを松原は強く思うようになりました。

前回同様一部稚拙な表現や、不快な文章があるかと思います。その点はお詫び申し上げます。その表現を通じて言わんとしている事・訴えかけたい何かを読み取って頂けましたら幸いです。

## 1章． 別れ

今から4年前の2003年の春。あの暖かく陽気な一日。  
私には到底受け入れられるものではなかった。

その朝。

私はまだ眩い春の生命がさえずる御茶ノ水の駅にいた。  
初めて訪れるこの駅の陽気さが気に入らない。

周りを見れば、皆これから始まる一日の活力に溢れていた。  
楽しそうに笑いながらプラットフォームに並ぶ高校生、家族連れ、ご老人たち。

私以外は皆今日という日を待ちわびていたかのように意欲に満ちているように感じた。

私は彼の葬式に向かっているというのに。

## 2章． 出会い

今から遡ること7年前。私は早稲田大学の入学式で彼と出会った。

私は入学式を心待ちにしていた。

私の受験勉強の経験で本が一冊出来上がるぐらいの想いを込めていたのだから、それも当然である。

“ねえねえ、あんたここの席オレ座ってもいい?”

私は学部別の入学式の会場に入り適当な場所に座っていると、いかにもパンクロック系の出で立ちの彼が話しかけてきた。

「ど、どうぞ・・・」

私はあまり関わらないようにそっと距離を開けた。

“まじホントたるくない? こんな式典早く終わってサークル回りしたいなあ”

勝手に話しかけてくる。無視無視。

“って俺の話聞いてんの?”

「は? 俺に話しかけよっと?’

思わず相手してしまった・・・。

“～しよっと? ってあんた福岡?”

「そうばい・・・」

“そう・・・ばい??！マジうける！”

勝手に受けんなよ、小僧。こっちは苦しすぎる浪人を経てやっとここに座ってるんだ。余韻に浸らせてくれ。私はそう呟いていた。

「あのさあ。オレ今日の入学式、楽しみにしてたんよ。あんま邪魔せんで」

“ご、ごめん”

おっ意外と素直な東京人だな。

“実はオレもすげー楽しみにしててちょっと浮かれてたんだよね。すみません”

「いやいや、入学式にラジカセ持ってくる人がちょっとやそっとの浮かれ具合やったとは思えん(笑)」

私とアベちゃんはこんな少し意味深な出会いをしたのだった。

彼は東京生まれの東京育ち。

身長は180cmを超え、精悍な面持ちで髪型以外は好青年だった。

現役で早稲田に来ていたので私より一歳年下。

非常に陽気で、人の意見を遮らない誠実さからすぐに皆から好かれた。

さてさて入学式の後。サークルを一通り一緒に見た私たちは帰りのバスに乗っていた。

“一樹は入試の小論なんて書いたの？”

「オレはヨーロッパを丸で囲んで斜線を塗り、それ以外はアジアって書いて・・・」

私とアベちゃんは哲学的な思想で思わず意気投合。

そして。

“ねえ、オレの親友になってよ”

「はあ？そげんとはなろうってなるもんじゃなかろう(訳：そういう関係はなりましょうとってなるものではなく自然に任せるものだろ)。お前、面白いな(笑)」

なんと図々しいことにそのまま彼は私の狭いアパートに転がり込んできた。  
1Kの狭い二階建てのアパートの一階にある私の部屋。

アベちゃんは実家でご両親と弟さんの四人暮らしで、通学時間に1時間かけていた。

狭い1Kだから大変迷惑な話ではあったが、ロフトが付いているのがせめてもの救いで。まあそれなりに楽しく過ごしていた。

“今日はオレが飯作るけん”

「あれ？言葉うつった？」

“あ”あこんな下品な言葉覚えさせられた・・・”

「・・・・・・・・」

“嘘だよ。今日はオレが作った牛肉の炒め物、食べよ。”

相変わらず慣れない二人が作るご飯は水を多く含み、ベチャベチャの状態。

まずい。

でもアベちゃんを作ってくれた牛肉の砂糖？炒めはかなりの美味で、あのまずいご飯さえおいしく感じたのが不思議だった。

### 3章 . 告白

私とアベちゃんは毎日語り明かした。

時には学校帰りに池袋の献血ルームで。

この献血ルームは池袋の雑居ビルにあり、ことあるごとに良く行っていた。理由は単純。世のために役に立てるし、無料で飲食出来たから。入学してバイトも見つかっていない私たちにとっては格好の溜まり場。

そこでは多くのことを語り明かした。

好きな Hide のこと。

好きな人のこと。

将来の夢。

今までのこと。

アベちゃんは愛情溢れる人だった。

皆に優しく語りかけ、今も笑顔のイメージしかない。昔からそんな感じだったのだろうか。私は少しだけ疑問を持っていた。

入学式から数ヵ月後の夜。

いつもは私の家で夜ご飯を一緒に作って食べていたのだが、今日は外で食べようと言い始めた。彼はあまり外食を好なかったので不思議に思ったが付き合った。

ただいつもみたいに笑顔が無い。

アパートに戻り、私は自分のロフトの布団を敷いて寝る準備をしていた。アベちゃんもロフトに繋がるはしごの下の付近に布団を敷いて寝ようとしていた。

そこでふと耳を澄ますと彼の鳴き声のようなものを聞いた。

“うううう”

嗚咽している。

「アベちゃん、どげんしたと？」

“今日は思い出したくないことを思い出してしまった。いつもは忘れるのにそれはいつも来る。必ず来るんだ”

彼は自分の過去を話してくれた。

彼は今でこそ社会的で皆から好かれる存在であったが、苛められていた時期があったという。それは陰湿で、とてもこの文章の中では書けることではなかった。想像をはるかに超える惨い仕打ち。

きっと彼がそんな仕打ちを受ける因果関係は何も無かったはずだ。こんなにも素晴らしい人間を苦しめる権利をいったい神以外だれが持ち得たであろう。

しかしこの苛めを解決したのは彼自身だった。

彼は語った。

“オレ、苛められているのは俺にも責任があるんじゃないかと思って、そいつらに問い詰めてみたんだ。悪いところは治すから腹を割って話そうって”

その後、彼の誠実さが彼らにも伝わり苛めは無くなった。しかも、その苛めて

いたやつらと仲良く遊ぶまでになったという。

“でも最近時々思い出すんだ。一樹のせいだな(笑)オレはHideの歌を聴いていたから立ち向かうことが出来たし解決できた。だからって訳ではないけど、オレ苛められている子達のために音楽を通じて助けたいとか思ってる”

私はこの話を聴いた瞬間の感動を今も刻銘に覚えている。

本当に苦労して早稲田に入ってよかったと思った瞬間だった。彼ほど人間味のある豊かな精神の持ち主に出会えたことに言葉では言い表せないほどの感動を得た。

この告白を機に、私も彼もエンジンが全開に回り始めた。

そして私も自分に出来ることを通じて役に立てることを早急に探した。そして、家庭教師という選択肢に行き着いた。

高校時代の自分のように自信の無い生徒に、当たり前前の光を与えたいと思ったのだった。

彼に負けないように、恥じぬように私も自分の”内なるボイス”を追い求めたのだった。

#### 4章．別居状態

お互いが忙しくなり、会う時間が一気に無くなった。

ただアベちゃんのサークルバンドの活躍ぶりは色んな友人から聞いていた。その度ごとに私は”アベちゃんも頑張っている、オレも頑張るぞ”と思ったものだった。

そして不思議と今は会わないほうが良いと思っていた。

お互いに実績が出始めるまで合わない方が、実績が出て会うときの会話の質を高めるのではないかとお互い思っていたのかもしれない。

時が過ぎ、私たちも就職活動の時期に来ていた。

私は就職を自分の人生にどのように捉えていくべきか定まっていなかった。このまま起業できないか・・・など、そんな感じなので当然就職活動の面接では一貫性がなく悉く失敗していた。

そんな大学3年(2003年)の3月、アベちゃんが就職活動で悩んでいることを共通の友人から聞いた。

“アベちゃんも就職で悩んでるのか。オレと同じく自分のやるべくことを就職に見出せていないのかもしれない。別居して早2年。殆んど話してないなあ。”

私はその時すでに家庭教師の実績には定評があり翌年度以降、つまり卒業後の家庭教師依頼が舞い込むほどだった。アベちゃんもその活動の功績が認められライブハウスを貸しきるほどになっていた。

“お互いそれなりに実績も積んだんだし今度久しぶりに誘ってみるかな”

しかし、それから一ヶ月。  
私は毎日の繁忙さに感げ、結局会えずじまいに時が過ぎた。

そしてあの日。2003年3月24日の夜中3時。

着信音が鳴った。

真夜中の携帯の画面が友人の名前を表示した。  
私は何故か電話を取ることが出来なかった。  
何故か絶対に取ってはいけないと思ったのだ。

結局、その電話には出る事が出来ず寝ることにしたのだが、どうしても気になり眠れない。携帯の時間はすでに朝の5時を表示していた。

意を決し私はその友人に電話してみた。

「プープープー」

“あれ繋がらない・・・”

とその瞬間。  
電話が鳴った。その友人からだった。

“なんだよ、こんな夜中に二回も電話してきて”

私は怖さを隠すために強気な口調で友人を責めた。

「2回？それよりアベちゃんが亡くなったらしい。今アベちゃんの親御さんから

聞いた。死因は教えてくれなかった・・・と言うことは・・・」

私は遮り、

“・・・お前、それでオレに二回も電話してくれたのか・・・”

私は早くこの電話を切りたかった。なぜならアベちゃんが亡くなったことを話す会話を止めたかったからだ。

「オレはこの一回しか電話してないよ。でも不思議だったんだ。お前に電話するとき電話帳の一番上に”松原”が登録されていたから。ミで”マツバ”ではなく”ア”と書いてあったし。」

私はその時悟った。そうか、あの3時の電話はアベちゃんからだということ。最初に教えてくれたんだね。

“でも、まだ信じられないよ”

それから彼のお葬式までの数十時間は時間が止まっていた。

何も分かってあげることが出来なかった。

してあげられなかった。

自分勝手だった。

私は自分を悔いた。

あの優しさと安らぎに似た不思議な空気を与えてくれる屈託の無い笑顔。「一樹！」と友人から呼ばれたのは生まれて初めてだった。嬉しかったのに。

嫌味の無い彼からの言葉一つ一つが、キミのその苦しそうな亡骸から発せられていたなんて信じる事が出来ない。

もう二度と呼びかけてくれないんだね。

## 5章 . 最後の試練

今から4年前の2003年の春。あの暖かく陽気な日の朝。

私はまだ眩い春の生命がさえずる御茶ノ水の駅にいた。

初めて訪れるこの駅の陽気さが気に入らない。

周りを見れば、皆これから始まる一日の活力に溢れていた。

楽しそうに笑いながらプラットフォームに並ぶ高校生、家族連れ、ご老人たち。

私以外は皆今日という日を待ちわびていたかのように意欲に満ちているように感じた。

私は彼の待つ会場へと急いだ。嫌味なほどの青空。澄んだ空気。

都会の喧騒を忘れさせてくれる、そんな暖かい一日だった。

会場に着く。

見慣れた友人たち。あるいは見慣れない人たちで溢れていた。

サークルの仲間と思しき人も多くいた。

泣いている人もいた。

なんで泣いているか一瞬分からなかった。

なぜ私がここにいることさえも。

そして思い出した。彼に似た、初めて見る弟さんを見たときに。

“俺、アベちゃんの葬式に来ていたんだ”

そんなことすら正しく認識出来ずに私は式を傍観していた。  
まるでテレビCMを見るかのように。

しかし。

その式の中で、皆は会場の二階に向かった。私もつられて階段を上る。一步一步、気だるそうに歩いた。

彼は檜の御棺の中で静かに眠っていた。  
そして一様に花をたむける。

最も彼と近づいた瞬間。  
初めて私は、浮ついた気持ちがキミの死の時間となり腑に落ちた。

静かに眠っているはずのキミは、苦しそうな顔をしていたんだ。

私の浮ついた気持ちは、彼の死を実感させる川へと変わった。

これほどまでに惨いことがあっていいのか。

私の中のパラダイムが大きく変わる瞬間であった。  
人は死ぬ。自分も死ぬ。

このことを遠い未来のことと考えていた自分の考えが大きく変わったのがこの

瞬間に分かった。

その時私は誓った。

“アベちゃんの生きてきた意味、それを私にしか出来ないやり方でこの世に残して見せる”

私は彼と語った日々を思い返していた。

世の中のひとが求めるもの。彼が教えてくれた自分にしか出来ないもの。

その二つが重なる部分に、人生を捧げようと。

この日から私の就職活動は人生超越的なものとなった。

最終章．決心

彼の死を無駄にしたくなかった。

無駄ではなく、どうしても無くってはならないもの存在にしたい。

そして、私が生きてきた人生を思い返した。

早稲田の文字が胸を駆け巡る。

これだ。

彼は私に教えてくれた。

「一樹は人の気持ちの問題を解決するの、上手いよね」

自分自身、怖がりで現実に怯え過ぎた中学時代。

それでは駄目だと何度も挫けながらも変わらない自分がいた。

自己嫌悪。

そんな私でも自分の可能性を心から信じ、周りの人に助けられどうにか大学に合格できた。そしてやれば出来るんだという卑近なことを信じられるようになった。

そしてアベちゃんとお会えた。  
受験生の力に少しだけなれた。

自分の使命を見つけた。

それもこれも、私が愛した早稲田大学が与えてくれた。  
私には大学受験を通じてしか人の可能性を広げることが出来ないことをも。

卒業後3年間、メガバンクのシステムエンジニアになることに決めた（結局は2年で職務を終えることになる）。経営者としてのスキルを身に付けるなら他にももっと有効な職があったらろう。しかし、当時の私が最も苦手とするITを使って、社会のインフラ構築を職業に選ぶほうが必ず自分の糧になると信じた。先輩や上司からすればどうしようもない部下だったと思うが、私は本当に感謝している。変わることが出来たのだから。

今、私が事業として行っていることはサービスのライフサイクル上で言えば導入期。始めた当初は競争がいなかったが、いまや徐々に増えていっている。

アベちゃんが教えてくれた自分にしか出来ないことを体現しているこの仕事。

あの言葉を言える日まで私はこの仕事に全身全霊捧げていきたい。

あの言葉？

そう、今はその言葉を言う資格は無い。

しかし必ず言ってみせる。

それを言うことが出来たとき、私は彼の生きた人生のかけがえのなさを世の中に示すことが出来るのだ。

すべては今生きているこの社会のために。

### 【未来研究所代表 松原の経歴】

大学受験コンサルタント。偏差値 29 から和田秀樹氏の大学受験法で大学受験に開眼。その後、独自の視点を取り入れた勉強法で無事第一志望の早稲田大学人間科学部に合格。大学在学中は家庭教師として、その独自の勉強法で 60 名の生徒と向き合い一流大学へ導いた（東大合格者 12 名）。2004 年同大卒業後は UFJ & Hitachi Systems の金融 SE として Day 1 統合案件を完遂後、2006 年 3 月末に退社。その後、有限会社 NET ARUZE SCF 教育事業部を立ち上げ家庭向け大学受験指導業務、および学校法人コンサルティング業務を中心に活動。大学受験に悩む全国の生徒からの支持を受け、2007 年 2 月同社教育事業部門の別法人化を行い株式会社未来研究所（<http://www.netaruze.com> TEL:092-477-6300）の代表取締役社長に就任。